

月刊

# いじろのとも

第八卷

五月号

## 捨てる執らわれ

執らわれを  
捨てる執らわれ  
乗り越えて  
この身のままに  
仏となれよ  
執らわれを  
捨てられぬ身の  
凡夫なら  
捨てる執らわれ  
捨ててはならじ

## 疑と信

科学は  
疑うことを  
教えている  
なのに  
宗教が  
信じることを  
教えない

# 人生を考え直して

## みたい人は(四一)

『聖書』解説(一七)

今月からマタイ福音書第六章に入ります。

一人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。

二だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラツパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。

三あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。

四あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見えおられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

今月号で取り上げた部分は、宗教にとつても大切

な、他者への善行・施しをするときの心構えを説いています。

趣旨を一言でいえば、施しや善行は、自己のためにするものであつてはならないということです。この考え方は、仏教の「お布施」の考え方と軌を一にしています。

まず、一節ですが、人に見せるために人前で善行をしないように、ということですが、何故なら、天におられる父から報いが受けられないから、ということですが。

一見、よく分かることばのように思えますが、なかなか難しいと思います。特に現代人にはそうだと思えます。なぜなら、「天の父なる神」の存在を「信じる」ことができないからです。

キリスト教者の解説書を読んでみても、多くは天の神から、死後、あの世で、報いを得るといふ考え方が殆どです。

でも、私は、そうは思いません。この世で報いを受けるのだと思うのです。

何故なのでしょう。それを理解して頂くためには、まず、お布施が、それをする人にとつてどんな意味があるのか、考えてみなければなりません。

ここで出てきていますように、自己ではなく他者のためにする施しは、自己を否定することを意味しています。

人は誰でも、自分の生を追求したいという欲求をもっています。その主なものは、食欲、性欲、優越欲です。この最後の優越欲という用語は、聞きなれないものだと思いますが、それは、他者に優越したいという欲求です。他者より金持ちで、高い社会的地位にいたい。他者よりよく何事も知っていたい。他者よりよい家に住み、よいものを食べ、よい着物をきていたい。そして他者より長生きがしたい。人は誰でも、こうした他者と比較して優越したいという欲求をもっています。

しかし、人間はこうした欲求を満足させればさせるほど、自己が傲慢になって行きます。何でもが、自分の思いどおりになると思ってしまう。でも、どんなにおごった人でも、最後に訪れる自分の死の恐怖を克服することはできません。自己が傲慢になればなるほど、死の恐怖は迫ってくるのです。それは、仏や神の世界から遠ざかっているということなのです。

少し理屈っぽくなりますが、私たちは、自己を肯定して生き延びたいと思う（働きがある）のに、死んで行かざるを得ないという自己を否定する働きをも自分の中に持っています。それは絶対な真理であり、「盛者必衰の理（ことわり）」と言えます。私はその働きを「他己」と呼んでいます。その他己の根っこにあるのが、神や仏

の世界なのです。

私たちが、自己を肥大化させ傲慢になることは、この他己を萎縮させることなのです。自己を肯定すればするほど、実は、他己は否定の働きを強めてくるのです。神や仏が否定の働きだけを持つものになって行くのです。

でも逆に、自己の働きを弱めれば弱める（否定する）ほど、他己は否定の働きから肯定の働きへと変わります。神や仏が自己を支えるものに変わってくるのです。私たちは、神や仏によつて、ただ生かされて生きているだけなのだということを実感することができなのです。そして、自己への執着をすべて捨て去るとき、神や仏が自分の中で輝いてくるのです。神の国が自分の中に現れて来るのです。

そうなったとき、はじめて、何が起ころうと幸せであると思えてくるのです。財産や命がなくなろうと、災害に会おうと、すべてをありのまま受け取ることができなのです。客観的には不幸なように見えても、本人は不幸とは感じなくてよいのです。

最初に戻って、「人前で善行をしないように、何故なら、天におられる父から報いが受けられないから」という部分の解釈ですが、これを大多数のキリスト者が考えるように、あの世に行つたとき生前の隠れた善行によつ

て天の神から報いを受け取ると考えるのではなく、徹底した自己否定によって、その報いとしてこの世で神を自分の中に磨きだせと言っている、と考えるのです。

次に移ります。「二だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラツパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。」という部分ですが、これまでの解説で十分ご理解頂けると思っています。

日本では、目立つ所で施しをする人はいません。まして、ラツパを吹きならして自己宣伝をし、お布施をするような人を見かけたことはありませんが、でも、神社仏閣で、寄附金の額と名前を書いた石碑やお札を見かけることはしょっちゅうあります。お参りすれば、大抵の寺やお宮で見かけます。これも、ここで言っています偽善だと思いません。寺やお宮もそうしないと寄附金が集まらないから仕方ないということもあるのですが、本当は、寺やお宮が信者に悪をなさしめているわけで、自らが、神や仏から遠ざかることを教えていることになっているのです。

次に、「三あなたは、施しをするとき、右の手の手していることを左の手に知られないようにしなさい。」の部

分ですが、これの、キリスト教者の普通の解釈は、善行を自分のためにしてはならないというだけではなく、神からの報いを思つて為してもならないと言っているとするものです。

確かに、その通りでだ、と私も思います。でも、多くのキリスト者はそれは厳しすぎると思っているようです。そんなこと、できっこないと思つているのです。

確かに、自分の中に神の国を実現していない普通の人ではそうなのです。現在のキリスト教では、そうなつていますので、神からの報いを思わないで為す行為など考へようもないのです。

でも、真の宗教的境地は、善行を神の報いを予想して為すところにはないのです。自分が為したいことをなすことが、全て善行であつて、そうできることそれ自身が神の報いそのものなのです。でも、こう言つても理解できるのは、その境地に達した人だけなのですが。

「右の手の手していることを左の手に知られないようにしなさい」のもう少しこつた、私の理論に即した解説をしておきます。私は左手と右手を「自己」と「他己」の象徴と考えます。右手という社会的な己である他己が為していることを、左手である個人的な己である自己に知らせないようにしなさいといつているということです。

つまり、為すがままに為すことがそのまま善行であるという事です。自己と他己が完全に統合されて、他己がなすことがそのまま自己である、ということ事です。知らせないようにしなさいということは、知らせる必要があつてはならないということなのです。

最後の「四あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見えておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」ですが、施しが隠れていれば、隠れた所で見えておられる神が報いてくださるというのですが、これは方便で、本当は、自己を否定し他己に徹することが、神の国の実現へ至る道だということ事です。

この福音書の著者であるマタイが、仏や神の境地が分からず、あくまで、隠れて天に居られる神が、あの世で報いて下さるものと考えて、この最後の部分も書いたのだと思われます。

最後に、いつものことですが、前述の自己と他己の完全な統合は、意識から隠れた所のことですので、そういうとうと意図してできることではないのです。ただ、ひたすら心を磨き、修行してできることなのです。その点で、現在のキリスト教には欠けていると思います。

次回に出てきますが、「自分の奥まった部屋に入り、戸を閉めて祈る」ことが必要なのです。

## 自作詩短歌等選

### 自信と他信

現代人は  
あたまだけが  
偉くなつて  
自信まんまん  
でも  
他信はない

### 右往左往

哲学者  
生き方求め  
見つからず  
あっちへ行つたり  
こっちへ来たり

### 疑うことが近代

近代は  
疑うことで  
始まりぬ  
疑えぬもの  
それが自己だと

デカルトは  
われ疑いぬ  
故にわれあり

### 傲慢顔にじむ

文化人  
名が売れるほど  
傲慢が  
顔ににじんで  
みにくきかぎり

## ペットとは

家で飼う  
子どもにとつての  
ペットとは  
愛情ささげ  
世話をやき  
統制をする  
相手なりけり

## だんだんと減る

人生では  
できることが  
だんだんと  
増えていく  
でも  
こころの清らかさは  
だんだんと  
減っていく

## 家庭での話し合い

家庭でも  
互いの間の  
話し合いが  
無くなつて  
ただ  
用事のときだけ  
非難のときだけ  
命令のときだけ  
口を開く

人生の  
善真美仁聖  
の価値や  
生き方を  
話し合うことは  
ほとんど無い

## 家屋は大・家族は小

いま  
日本では  
大きな家屋  
小さな家族

借金し  
でつかい家たて  
一人住む  
連れ合い子ども  
みな居なくなり

## 疑の教育

何ごと  
信じるよりは  
疑えと  
教える学校（社会）  
いつか崩壊

## 田舎を見直せ

田舎には  
自然はあるが  
金がなく  
都会には  
金があつても  
自然なし

いまの世は  
金がなければ  
成り立たず  
自然ほしくも  
あとに捨て  
みんな都会へ  
流れいく

いまこそ田舎  
見直せよ  
食糧不足の  
時ぞ今くる

# 自作随筆選

## 人の命の重さ

ペルーのテロリストによる日本大使館人質事件は、軍特殊部隊の強行突入によって、決着がつかしました。でも、十七人という多くの人命が失われました。テロリスト十四人全員、人質一人、兵士二人の尊い生命です。

この事件の報道をテレビ・ニュースで見ている、間違っていると思ったことが、幾つかありましたが、その中で最も困ったことだと思ったのは、テロリスト十四人全員の生命が失われたことに対する、多くの人たちの冷淡さです。

人の命の尊厳は誰にとっても平等であるということ

は、  
誰でもが、知っていると思います。なのに、十四人のテロリストが全員死んでしまったのは、真相は不明ですが、多分、無抵抗だった者も射殺してしまっただけではないかと思われれます。かつての日本軍のように捕虜になるより、玉碎を選んだとは考えられないからです。

こうした全員射殺をなさしめた裏には、テロリストは悪人だから、皆殺しにしても、咎められないという倫理

観があつたのではないのでしょうか。でも、それは、とても危険な思想だと思えます。何時だったか、アメリカ大統領が、日本の広島・長崎に原子爆弾を投下したのは、正当であつた、と言つたのと軌を一にする倫理観であると言えます。

自分に対して、悪をなしていると考えられる者の命の値は、自分が善をなしていると考えられる者の命よりも価値が低いという、殺す方の勝手な考え方があると言えます。

でも、人の命の重さを、そうした相対な判断で測ることは、できないのです。そうすることは、結局は、互いの戦いへと発展していきます。そのことは、共産主義者たちが、正義は自分にありと、かつて血の粛清をして、何十万人、何百万人の尊い命を犠牲にしても、遂に、共産主義が行き詰まってしまった歴史を見れば、誰でも分かることです。

こうした相対者の判断で人を殺すことでは、世界の平和は決してきません。争いがやむことはありません。ペルーの政府もテロリストも同じ穴のムジナだといえるのです。同じ土俵で相撲をとっているのです。人質を救うのに銃で抵抗する者のみを射殺することは必要な悪として認ずるとしてもです。

## 釈尊のごとば（五七）

法句経解説

（二〇〇）われらは一物をも所有していない。大いに楽しく生きて行こう。光り輝く神々のように、喜びを食む者となろう。

なんとすがすがしい偈でしょうか。

私たちは、多くのものを所有していると、考えているかも知れません。自分の財産、自分の家族、自分の知識、自分の技能、自分の名誉、自分の地位など、多くをもっていると考えていると思います。でも、そんなものは、決して自分のものではないのです。それらを自分のものだと思ふところに、つまり、それらに執着するところに、人間の迷いが起こります。実は、そうしたものを所有したと思うようなところには決して幸せはないのです。

かつて、法句経の第六二偈を次のような歌にし、第六卷九月号に載せました。

私には／子や財がある／そう言って／愚かな者は／  
悩みおりける／のだが／かし／すでに自己さえ／自  
らの／ものでないのに／ましてなぜ／子が我がもの  
か／財が我がものか

この偈にある通り、「われらは一物をも所有しない」のです。所有していると虚妄しているだけなのです。

次の「大いに楽しく生きて行こう」ですが、この「大いに楽しく」という文句に接しますと、私は、理趣経という真言宗常用のお経を思い出します。そのお経のフルネームが、「大楽金剛不空真実三摩耶経」なのです。この意味の解説は別の機会にゆずるとして、ここでは大楽についてののみ、解説しておきます。それは、この偈に出ています「大いに楽しく」と同じ意味だと思ふからです。

普通、「大いに楽しく生きていこう」といいますと、なにか、毎日、苦しみがなく、気ままに、楽なことばかりをして暮らすようなことを想像されるのではないのでしょうか。たとえば、毎度々々おいしいものを食べ、趣味のような好きなことをし、あらゆる欲望をみたすことができるように暮らすことだと思われるかもしれません。

この偈でいう「大いに楽しく」、あるいは、理趣経でいう「大楽」は、そうではありません。

大いに楽しいのは、そんな何か相対なものに依存した楽しさではないのです。おいしいものがあつたら楽しいとか、好き勝手なことができたなら楽しいとか、なにかの欲望を満たせたら楽しい、といったものではないのです。そうではなくて、何が無くても楽しいといった楽しさな

のです。生きていくことそのことが、楽しいのです。毎日々々、生きていくことの喜びが湧き出てくるといふ楽しさなのです。

この「喜びが湧き出てくる」というのが、最後の「光り輝く神々のように、喜びを食む者となる」という部分で述べられていることです。日々、食べ物が無くても、楽しく、喜びを食んで生きて行くのです。そうした人は、あたかも光り輝く神々のように、生気があふれ、光り輝いているように感じられるのです。

(二〇一) 勝利からは怨みが起こる。敗れた人は苦しんで臥(ふ)す。勝敗をすてて、やすらぎに帰した人は、安らかに臥す。

私たち「相対」なものは、字が示している通り、お互いに「あい対して」存在しています。ですから、私たちは、何かに「あい対する」こと、つまり何かに「定位」することによってのみ存在することができるのです。私の理論では、その働きを「他己」と呼んでいます。

普通、人が定位するのは人です。人の中に生まれ、人の中で育ち、人の中で働き、人の中で死んでいく、私たち人にとって定位する対象は、普通はどこまでも人なの

です。

つまり、人との関係の網の中に私たちは存在しているということなのです。ですから、相対的という言葉は、比較的という言葉で置き換えられますように、常に他者との比較を、その本質的特徴としているということなのです。

誰かに比較して、自分はどうかというふうに考えます。自己を中心にして考えますと、人に劣らないこと、人に優ること、つまり、人に優越することを、本質的な特徴としているのです。ですから、何かにつけて人に勝つことが、とても快いことになるのです。

また、その逆に負けたり、劣つたりしますと、怨みや妬みが起こってきてしまうのです。

では、こうした優越感や劣等感、怨みや妬みを避けるにはどうしたらよいのでしょうか。

そのためには、まず、定位する対象を、自分と同じ相対な存在である人から、自分を超えた存在である神や仏に変えなければなりません。人との関係の中に自己を満足させるものを探すのではなく、絶対・永遠・無限なるものに自己を満たすものを求めるのです。

しかし、相対なものにとって絶対・永遠・無限なる存在を、相対な認識能力で意識して知ることはできません。それを知るためには、相対な自己を無にして、ひたすら

絶対な他者を信じ、修行しなければならぬのです。

そうすることで、私の理論で言いますと、自分の無意識に潜む煩惱意識と如来意識とを統合し、一体化することができ、この偈です。その時、相対な他者とも一体となることができ、この偈でいうように、勝敗にこだわる必要が全くなくなってくるのです。

現代ほど勝敗に熱中する時代はないのではないかと思えます。あらゆる勝負事が隆盛を究めています。例えば、スポーツでは、オリンピックは参加することに意義があると、創設者クーベルタンは言いましたが、いまや、勝たなければ意味がなくなっています。

これは、人間が段々自己中心化し、他者に勝つことではなく、自己を定位することができなくなっているのだと思います。他己を回復し、他者から愛を奪うのではなく、他者に愛をあげることがめざす社会をつくって行かなければならないと思います。この偈は、現代にこそ大きな意味をもっているのだと思うのです。

(二〇二) 愛欲にひとしい火は存在しない。ばくちに負けるとしても、憎悪にひとしい不運は存在しない。  
このかりそめの身にひとしい苦しみは存在しない。

「やすらぎにまさる楽しみは存在しない。」

この偈のキーワードを並べてみますと、次のようになっています。「愛欲 火・憎悪 不運」「かりそめの身 苦・やすらぎ 楽しみ」です。順次、見ていきます。

先日、こちらで山火事がありました。二日に渡って燃えつづけ、何台も何台もヘリコプターが空を舞って、消火に当たりましたが、効き目があったのかどうか、わからないほどでした。風にあおられて燃え盛る火を消すことは至難の業です。なのに、その火よりも愛欲は、激しく燃え盛ると言っています。なお、ここで愛欲とは、男女の性的欲望だけを言っているわけではありません。私の用語で言えば情動の中の欲望です。主なものは食欲（物欲）、性欲（子孫繁栄欲）、優越欲（社会欲）です。

実は、現在の日本では、科学技術が発達し、個人主義が行き渡り、大抵の欲望が満足させられて、苦しみが減り、自己を肥大化させて、ますますこのエゴ的欲求の追求にうつつをぬかすようになっていきます。

ですから、山火事を消す以上に、この愛欲の火を消すことは、なかなか至難の業といえます。お金に不自由しない現在、食べてはいけなれないと思っても、美味しいものを控えることは難しいことです。飲んでほならないお酒

や煙草をやめることも難しいことです。セックス旅行やグルメ旅行は隆盛をきわめています。エゴの追求として、偉くなりたがる傾向は、私の勤める大学でも異常と思えるほど燃え盛っています。

これを、どうしたら消すことができるのでしょうか。自己に閉じている限り、自己をコントロールすることはできません。自己を開いて他者（絶対他者）を信じ、ひたすら修行する以外に方法はないのです。

次に「憎悪にひとしい不運」ですが、この前の偈の解説で述べましたように、現代では憎悪が社会全体として増してきているように思います。現代人は何か悪いことがあると、全て他者が悪いと、自分の悪いことを棚上げにして「下衆の逆恨み」をします。社会の運はますます悪い方に向かっていくとしか思えません。

次の「このかりそめの身にひとしい苦しみは存在しない。」の部分に移ります。

大抵の人は、この身がかりそめだと思っただけではないと思います。多くの哲学者も、身体をとて大切に思っています。この身が存在することが、人間の存在の証であると考えられるわけです。でも、この偈にありますように、この身はかりそめなものです。その意味ですが、それは、私たちが、自分自身で独立に存在することができないと

いうことです。私たちを取り巻く条件によって左右されるということです。相互依存してはじめて存在できるということです。修行によって、自分の中に実感しないかぎり、存在の根拠が自分の外にあるのです。そういう意味で、この身はかりそめなのです。存在の根拠が自己の外にありますから、このかりそめの身は苦なのです。

その苦を脱して、次の「やすらぎにまさる楽しみは存在しない」という文句が分かる境地に至るには、前述のように、修行して、自分の存在の根拠を自分の中に実感することが必要なのです。なお、やすらぎとは、涅槃とか寂靜（じゃくじょう）と呼ばれる境地です。

キリスト教では、莊嚴なる飾りや仏さまのような偶像崇拜を排しているようですが、仏教でも、何も莊嚴な偶像を目的にしているわけではありません。そこにキリスト教徒の誤解があると思います。そうしたものは、修行の過程で仏を自己の内に実感するのを助ける、一つの条件に過ぎないのです。仏はどこまでも自己の中にあるのです。キリスト教でも神は、自己の中に存在しているのです。

それは、しかし、「あたま」で考えて知れるものではありません。「あたま」と「からだ」と「こころ」を統合して修行するとき、実感することができるのです。

後記

一、目に入るすがすがしい木々の青葉、肌に吹きつける心地よい風、鼻に吹き込んでくる豊かな匂いの空気、みな生き生きとして感じられます。

二、畑仕事が忙しくなってきました。いろいろな夏野菜を植えました。キュウリ、トマト、ナス、里芋、ほうれん草、ネギ、カボチャ、サトウキビ、など입니다。今後、主なものとして、さつま芋と大豆があります。

三、昨年、「大阿闍梨法印増観」さんのお墓を修復して頂いた石屋さん、古い発動機の蒐集の趣味をもつていて、農家を探して歩くとのこと、私も古くても使える耕運機があればよいのと言っていたところ、探して、ご親切にも自分の軽四に積んで、二月中旬に、わざわざもってきて下さいました。

四、さらに、有り難いことには、親しくして頂いている近所の農家の方が、同じ機種の耕運機を使っていたというので、使い方を親切に教えて下さいました。お陰で、とても調子良く動いてくれます。久保田製でもう二〇〜三〇年は使っているのではないかと思えます。今後も、大切に使うてあげたいと思っています。

五、畑をお借りしている地主さんに、果樹を植えたいと言ったところ、今は竹藪になっているかつての畑を、開

墾して植えて下さいとのお許しを頂き、竹を切り倒してクワで根を掘っているのですが、とても大変です。農家の方に聞きましたら、果樹を植える場所だけの根を掘り起こして、後は竹の子が出る度に折って、新しい竹を生やさないようにすれば、数年で根が腐ってくるということでした。そうしたいと思っています。

六、毎日、蔵書のパソコン入力をし、やっと終わりました。でも、今後、蔵書それぞれに分類番号を付け、ラベルを貼る作業が残っています。蔵書の整理と今の書庫の床を補強するためもあり、新しい書庫として、六畳ほどの物置とそれに入れる書架二〇本を買いました。

月刊 こころのとも	平成九年五月八日
第八卷 五月号 (通巻 八十九号)	徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>よしと</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと と 口座番号 01610 8 38660	

